

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270400759		
法人名	社会福祉法人 祥仁会		
事業所名	グループホーム貝津		
所在地	長崎県諫早市貝津町2239-2		
自己評価作成日	令和4年7月26日	評価結果市町村受理日	令和4年11月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構		
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1		
訪問調査日	令和4年11月7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設して19年経過しているものの、日々の清掃やメンテナンスで明るく清潔ある施設であると思いません。介護理念にもうたわれているように「家庭的な雰囲気の中で共に毎日を楽しみ、その人らしい暮らしができるよう援助する」職員一丸となって介護をさせて頂いてます。新型コロナ禍の影響により、ご家族との面会など制限がありますが、広報誌の発行や個別でのお知らせ、受診記録等毎月送付しており、入居者様の様子をこまめにお知らせしています。同グループの西諫早病院との連携も図り、入居者様の体調に不安や異常があれば、早期に相談や受診を行い体調管理にも努めています。現在、介護度が高い入居者様も多く、介護技術や様々な疾患等についての勉強会なども行い、職員のスキルアップにも努めています。

定員9名の地域密着型グループホームとして開設後19年が経過し、ホームは町内会に加入して回覧板の受け渡しや、地域住民から福祉用具の使い方など介護相談を受けたり、日常的に地域住民と挨拶を交わすなど地域の一員として当該地域に溶け込み、日々繋がりを深めている。近隣にはホームの協力医療機関である西諫早病院があり、入居者の健康面や、緊急時の対応等、連携すると共に、行政・医療・地域等、関係機関との協力関係を築いている。ホームの裏庭には菜園があり、職員と入居者が芋や大根、トマトなどの野菜を育て、収穫を喜び、食卓にも並べて美味しく食べることが入居者の楽しみの一つとなっている。コロナ禍で家族との面会制限がある場合でも職員が入居者の状況を電話で伝え、また、毎月発行するホームだより「しあわせ新聞」においても入居者個々の表情が分かる写真と詳細を載せて報告しており、家族の安心に繋がっている。ホーム内は明るく清潔感があり、要所に季節感のある飾りつけを採り入れ、入居者の見当識への配慮が窺える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット名

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	介護理念をホーム内2か所に掲示している。今年度は、職員全員の勉強会として地域との関わりや役割も学んでもらい、理念や運営方針等再確認を行った。	ホームの理念は重要事項説明書に記載して家族や入居者にも説明すると共に、「家庭的な雰囲気の中で共に毎日を楽しく、その人らしい暮らしができるよう援助する」と共用空間に掲示し、日々の業務の中で常に理念を目にすることで職員の意識づけを図っている。今年度はホームの地域との関わりや社会的役割を学ぶ機会を設け、理念や運営方針の再確認を行った。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に属しており、回覧板の受け渡しや民生委員を通じて、グループホームの活動について理解を深めてもらっている。	ホームは町内会に加入して回覧板の受け渡しや、地域住民から福祉用具の使い方など介護相談を受けたり、日常的に地域住民と挨拶を交わすなど地域の一員として当該地域に溶け込み、日々繋がりを深めている。感染対策を講じた上で、地域のボランティアによるウクレレ演奏をホームで披露してもらうなど、今できる交流を大切に継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	電話や訪問での入所や認知症の相談に対し、助言を行っている。コロナ禍である為、ボランティアや訪問などは行っていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍である為、2か月に1度、運営推進会議の資料を作成し関係機関やご家族全員に配布している。又、助言や意見等頂いており、次の会議の議題として取り上げるなど活用している。	運営推進会議には、入居者、家族、町内会長、民生委員、市職員、地域包括支援センター職員等が参加している。コロナ禍により書面や電話にて各委員より意見を聞き、助言等を得ている。入居者状況、行事、ヒヤリハット・事故報告、介護実践事例検討会報告等の報告を行い、ホームの現状や取り組み等を伝え、各委員からの意見を収集し、それらをサービスの向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	在宅医療介護のかけはしからのアンケート調査や聞き取り調査にも参加している。市町村に関しては、運営推進会議の資料配布、情報共有を図り協力体制を構築している。	行政担当者より運営指導マニュアルを用いた運営上の指導を受け運営に活かしている。感染対策等のアドバイスや情報提供を受け、協力関係を築いている。市の担当課には事故等の報告や、疑問点等について適宜相談する等、情報交換しながら連携を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会の設置、月に1度のスタッフ会議で、目標に対して評価を行っている。又、年に2回、身体拘束の勉強会を行い、身体拘束をしないケアを実践している。	ホームでは毎月身体拘束廃止に関する目標を設定し、職員が目にする場所に目標を掲示して意識づけを図っている。年に2回身体拘束及び高齢者虐待防止の勉強会を開催し、研鑽している。家族の同意のもと、センサーを設置しているが、入居者の行動を制限するものではなく行動を察知するために使用している。職員はクッション言葉などを用いて入居者を抑制するような言葉かけに留意し、実践に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に2回、高齢者虐待防止の勉強会が実施できるように取り組んでいる。又、全職員で入居者様に対する言葉使いや態度等高圧的ではないか注意しあえる環境を作っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	運営推進委員会の議題として同法人内の社会福祉士による権利擁護に関するパンフレットを用いた談話や事例等を学ぶ機会を作っている。又、職員が自主的に閲覧できるようなパンフレットがある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所前に、ご家族と本人様と面談を行い、利用の手引き等を用いて説明している。又、ご家族の意向や問題点なども相互に理解できるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関口にご意見箱を設置している。又、面会時や運営推進会議の際に意見交換やケアに対する要望なども伺うようにしている。	職員は入居者との会話の中から意見や要望を把握している。現在、コロナ禍により家族との面会は短時間のガラス越しとなっているが、担当職員が中心となり面会時や電話等で家族の意見や要望等を聴き取り、運営に反映させている。家族より、入居者を運動をさせてほしいとの要望があり、「運動記録表」を作成して支援した事例があるなど、意見を反映し家族の安心に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	通常の業務内でも職員からの意見や要望があれば、管理者より事務長に報告し、改善策を模索している。又、申し送りノートを活用やスタッフ会議で問題点をあげ、全職員で情報を共有し解決できるよう取り組んでいる。	ホームでは希望休や有給休暇の取得、育児休暇等、職員の希望に沿った配慮がなされている。年1回、事務長による面談があり、運営に関する意見のほか異動等の意向確認などを行っている。職員より、足浴の時間が取れない等の意見があり、効率性を考慮して昼・夜の食事を外部委託とし、入居者と関わる時間を増やした。	今年度よりハラスメント対策の強化が求められており、運営に関し職員意見や提案等を円滑に反映させる為にも、ハラスメントマニュアルの整備や相談窓口の設置、職員研修等、今後、組織的に取り組むことを期待する。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の声を吸い上げ、業務改善や「環境整備」に取り組んでいる。年に2回、自己評価を行い賞与に反映させている。又、年に1度の意向調査を行い、同法人内で希望する部署があれば異動できるシステムもある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナウイルス感染症で外部の研修にはほとんど参加できていないが、現在は、オンライン研修などの参加を促している。又、研修報告書を提出してもらい、運営推進委員会の資料として載せている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者や他職種とのオンライン研修を通じて意見交換し、サービスの向上に努めている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前にご家族に面談し、意向を伺い初回ケアプランを作成している。又、定期的に本人様やご家族への意向、要望を伺い、各担当者からの評価等でケアプランを反映させている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前にご家族が困っていること、不安なこと、要望等を伺い、入所してからホームでの生活やご家族の思いが合致し、ずれないようにコミュニケーションを図っていく。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	共通の認識でサービスの提供ができるよう話し合う場を設け、本人の思いに沿ったケアを全職員で取り組んでいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	グループホーム貝津の理念である「家族的」を目指し、本人の思いを組み取りながら、その人らしい生活ができるよう支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月よろこび新聞、しあわせ新聞を発行し入居者様の施設での様子を見て頂くことで、安心感を得ている。その他にも、電話等で近況報告を行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	日常生活の中で、昔のことや、アルバムを見てその方の生活歴を思い出して頂く。現在、コロナウイルス感染症対策を行いながら、オンラインでの面会ができるよう取り組んでいる。又、他県からの面会は窓越しや電話等で対応し、コミュニケーションが図れるよう支援している。	馴染みの人との面会はオンラインでビデオ通話ができるよう整備している。墓参りや入居者の馴染みの店での散髪については家族へ外出の協力を依頼し、馴染みの人や場所との関係が途切れないよう支援している。96歳のボランティアによるウクレレ演奏会に参加し、入居者の喜びに繋げている。コロナ禍の中、可能な限り馴染みの関係が途切れないよう支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事やソファでゆっくりと過ごす際の席の配置を考慮し、入居者同士の会話が楽しめるようにしている。また、日常的に歌や体操等のレク活動や家事手伝いを皆様一緒に行っていたり、関わり合えるように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご利用が終了してもこれまで築いてきた関係を大切に、随時相談して下さるよう信頼関係継続に努めている。また、ご家族、知人からの入所申し込みも頂いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々、会話や行動の中で読み取れた意向や訴えは、職員間で共有し、カルテなどにも記録を残している。変化や気づきがあった際も話し合い、より良いケアが行えるよう検討、変更を行っている。	10月に認知症高齢者の心理に関する職員勉強会を開催し、認知症ケアの方法を学ぶ機会とした。職員は日々の支援を通じて、入居者の言動や表情といったサイン、身体の動き等によりその方の思いや意向を汲み取るよう努めている。必要な情報は入居者の言葉をそのまま記録に残し職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日常的に昔の話をお聞きし、好きな事や大切にしている物等を把握し、コミュニケーションを取っている。良い思い出を引き出せるよう関わりに心掛けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日のバイタル測定、会話や表情を見て様子観察に努めている。異変があれば職員間で情報を共有し、早期対応が行えるよう記録し、連携を図っている。残存能力を生かしたケアにも努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月に1度のスタッフ会議で入居者様一人一人のケアの見直しや意見を職員から聞き取りを行っている。また、担当職員が月に1度、ケアプランの評価を行い、ご家族や本人の要望も踏まえ介護計画を作成している。	スタッフ会議を通じて入居者の状況に関する意見の交換を行い、計画作成担当者と相談しながら介護計画の見直しを行っている。担当職員は入居者の家族にも意見や要望を聴き取り、介護計画を立案している。モニタリングも担当職員が行い、介護計画に対する職員の意識付けを図っている。必要に応じて関連施設の管理栄養士等の専門職より助言を得て介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人が発した言葉や体調、状態の変化等気づいたことも含め、記録に残し職員間で情報の共有を行っている。また、細かな事や見直しなど、申し送りにも記載し、各自目を通してもらい周知を図っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	介護度が高くなり、今後についてご家族と話し合う機会も増えている。可能な限り、本人やご家族の意向も踏まえ支援を行うようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍でもあり、地域と入居者様の関わりも難しくなっているが、今後は地域活動にも、可能な限り共に参加できればと思っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	同グループの救急病院、症状に応じた協力医の受診や往診を行っている。何か急変や心配事があれば対応の助言を頂く等関係性を構築している。	受診後は受診明細書を毎月家族へ送付している。ホームの系列病院である西諫早病院への受診には職員が同行し支援している。精神科の受診にはオンライン受診に対応できるよう配慮している。協力医とは緊急時の対応のほか、看護師とも連携し、入居者の変化や急変時にも助言や指導を受ける関係を構築し、家族の安心に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	受診時に職員が付き添う際は、本人に代わって詳細に状態を説明し助言を頂いている。また、緊急受診が必要と判断した場合は、事前に電話にて状況を伝え、受診の相談や調整等を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	看・介護サマリー等を通して情報を共有し、入院中もご家族やソーシャルワーカーと連携を取り、経過状況の把握、退院後についての方向性も定めるよう努めている。退院後のケアも全職員が情報を共有できるよう申し送りを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですべてのことを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居前に終末期に対する意向を確認している。また、ホームでは看取りを行わない為、どこまで対応できるかを明確にしご家族にも説明、同意を得ている。その中で「わたしの思い」という内容でご家族に記入をお願いし急変時を含めた対応について意思の再確認を実施している。	入居前に、重度化した場合のホームでの対応等について家族へ説明し承諾を得ている。「私の思い」と題し家族へ意向を確認し、入居者が重度化や終末期に至った際の意向を確認している。ホームでは看取りを行っていないが、職員は死生観や終末期に関するオンラインの研修会に参加した。医療的ケアが必要となった場合は協力医療機関や関連施設である特別養護老人ホームと連携し、円滑に移行できるよう連携している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入職時はもちろん、定期的に救急搬送訓練を実施し、全職員が急変時に対応できるよう取り組んでいる。また、夜間の緊急時マニュアルや連絡網も整備している。基本前日の夜勤入りがオンコール者ではあるが、時間帯に応じたオンコール制度も設けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	職員のみ自主避難訓練(夜勤帯・日勤帯)を年に4回、消防署、消防団、警備会社、消防設備点検会社を交えた総合避難訓練を年に1回、入居者も交え実施している。また、風水害時のマニュアルも作成、備蓄も常備している。	年1回、地元消防団との総合避難訓練を実施し、近隣住民には、訓練前に事前に案内をしている。令和3年11月の訓練には地元消防団員3名が参加した。災害避難マニュアル、ハザードマップは廊下壁面に掲示し、緊急連絡網はキッチンの上に付きやすい場所にて周知している。避難訓練等は全職員と入居者が一緒に取り組んでいる。総合訓練時には全職員が消火器を操作して訓練を行っている。	自然災害が顕著になっている昨今を踏まえ、現在は未だ経過措置となっているが、今後、BCP(業務継続計画)の策定に着手し、具体的に取り組むことを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者様を常に意識し、尊厳ある言葉使いを心掛け安心して日常生活を送って頂けるよう心掛けている。	年間研修計画の中に接遇マナー研修を組み入れ、定期的に研修を行っている。職員が外部研修に参加した場合は研修報告書を提出している。入居者の写真使用等、個人情報の取り扱いについて家族へ説明すると共に、職員の守秘義務についても誓約書を取り、プライバシーの確保の徹底に取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	活動支援を行う際は、入居者様に負担が掛からないような声掛けを行い、本人の意思を確認している。また、なるべく他の入居者様と関わりが持てるよう配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者様の思いを日頃から傾聴し、本人の健康状態や精神状態を考慮し、対応を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外出時は、本人の希望を伺いながら好きな服を選んで頂き、季節感やTPOにあわせた服装になるよう心掛けている。定期的に、訪問美容を利用し、カットだけでなく、毛染めを希望される方にはホーム内ですて頂けるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	それぞれの食事形態に合わせ提供している。彩りや盛り付け方にも工夫している。介護度も高くなり、配膳や下膳ができる入居者様が少なくなっている為、お盆拭き等簡単な作業を手伝ってもらっている。	職員意見を踏まえ、効率性を考慮して昼・夜の食事を外部委託とし、入居者と関わる時間を増やした。主食のごはんや汁物はホームで調理し提供している。料理の温めや盛り付け、キザミなどは職員が行い、嚥下状態に応じて職員が介助している。旬の食材を用いて季節の行事食を提供したり、おせち料理やかっぱぼう弁当、ケーキなどのおやつは入居者の嗜好に合わせて提供している。収穫したイチゴや芋を使って食卓に並べる等、食を楽しめるよう工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者様の病態や咀嚼、嚥下状態にあった食事形態や食事量、水分量を全職員で把握している。トロミが必要な方に関しては、その方に合ったトロミ粉の量で調整している。また、脱水予防の為、お茶だけでなく、アクエリアスや甘い飲み物なども提供し、1日の水分量に配慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時と毎食後の口腔ケアを個別で行い、歯間ブラシなども利用し職員が仕上げ磨きも実施している。夜間は、入れ歯洗浄剤にて消毒している。また、必要な方には、協力医であるみぞこし歯科に往診に来てもらい義歯の補修や口腔ケアの指導なども行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、個別での排泄間隔や排便の状態を把握しており、トイレ誘導の声掛け、誘導を行っている。また、ズボンの上げ下ろし等、残存能力を活用して頂けるような声掛けを行い、その方に合った介助、ADLの保持に努めている。	職員は入居者一人ひとりの排泄パターンを把握し、声掛け誘導しながら日中はできるだけトイレでの排泄支援を行っている。夜間は、必要な方はトイレ誘導、または居室のポータブルトイレへ誘導を行い、入居者一人ひとりの希望に配慮した排泄支援に取り組んでいる。汚染した場合も必要に応じて入浴・清拭・陰部洗浄等を行い、本人の羞恥心に配慮しながら支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食時に牛乳を提供、10時、15時に麦茶やコーヒー、紅茶等味の変化をつけながら水分補給を促している。また、汁物などにも繊維質が多い食材を利用するなどの工夫も行っている。日々、運動する機会を設け、体操や歩行訓練を行っている。自然排便が難しい場合は、個々に応じて下剤を利用し、腹部や肛門マッサージを行い排便コントロールをしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週に2回の入浴を基本とし、入居者様の希望に応じ柔軟に対応している。季節に応じ、しょうぶ湯や柚子湯も実施しており、入居者様に季節感を感じて頂ける取り組みも行っている。入浴がない日は、足浴も実施しており、皮膚のケアや整容にも力を入れている。	週2回の午前10時からの入浴を基本に支援している。入浴順番や同性介助等、入居者の希望に応じて柔軟に対応している。個人購入によるボディソープや化粧水など本人の好みの物を使用できるよう配慮している。蒲湯やゆず湯など入居者に季節を感じてもらえる工夫を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中傾眠が強い方に対しては、昼食後30分程度午睡する時間を作り、リフレッシュして頂いている。夜間も、良眠できるよう昼夜逆転を防ぐため、日中、家事手伝いやレク活動も積極的に行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	朝食前や食前薬、朝・昼・夕、眠前等薬箱を作成し、誤薬が無いよう心掛けている。服薬マニュアル通りに、本人の名前、日付け、朝、夕などの区別を声に出し与薬している。また、受診時には、本人の状態の変化に伴い、薬の変更等がある為、カルテ、申し送りノートなどに記載し、職員全員の周知を図っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入所時にバックグラウンドを作成したり普段の会話の中で、本人が好きな事や生活歴を把握している。畑作業が好きな方に関しては、一緒に草むしりや収穫を楽しむなど役割や楽しみを持って頂けるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍も継続しており、普段の外出が難しくなっているが、計画的にドライブや花見を行っている。また、ご家族からのご厚意もあり、9月には日帰り温泉も計画している。	コロナ禍により外出の機会が減ってはいるものの、感染対策を講じ、入居者はホームの近隣を散歩したり、ホームの菜園で野菜を作るなど気分転換を図っている。計画していた9月の日帰り温泉は実施することができなかったが、計画的に花見やドライブのほか、ホームで鳥居を制作して初詣を体験してもらうなど、コロナ禍でもできることを工夫し支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	当ホームでは、金銭を本人が持つことがない。必要なものがあれば、ホームで購入し、毎月の請求時にご家族に支払ってもらっている。また、財布やお金に執着されている入居者様に対しては、事務所で預かっていると安心するような声掛けを行い、理解して頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族やお孫様からの電話があれば、入居者様に出てもらい、会話をしている。また、遠方に住まれているご家族様より手紙等頂戴することもあり、入居者様に読み聞かせし喜んでいただいている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を感じて頂く為、壁面を使い、季節折々の花やイラスト等を使った壁飾りを作成し掲示している。居室入り口には、入居者様と担当職員の写真を掲示している。又、廊下や洗面台、浴室の気温差が無いよう、温度計を設置、定期的に換気を行う等感染や臭いの対策を行っている。	ホーム裏の敷地内には菜園があり、時季に応じた野菜や果物を植え、成長と収穫を楽しんでいる。共用空間の座席は食事介助が必要な方を考慮し配置している。職員が制作した季節感のある飾りつけは入居者の見当識にも配慮し、季節の花やイラスト等の装飾が入居者や訪問者も和ませている。朝夕の清掃と、換気を適宜行い、清潔保持に努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有スペースであるリビングでは、気が合う入居者様同士が隣り合わせになるよう席順を決めている。また、不穏であったり、歩行が不安定な入居者様に関しては、職員の目が届く範囲で過ごして頂いたりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に、自宅から本人の馴染みの物を持ち込んで頂いたり、家族写真や花など、本人が落ち着くような装飾品を飾っている。また、誕生日会に担当職員からプレゼントされる色紙も掲示している。	居室への持ち込みには特に制限を設けておらず、以前は仏壇を持ち込む入居者もいた。室内には家族の写真を飾ったり、使い慣れた物を配置しており、居心地の良い空間となるよう工夫している。ポータブルトイレを使用している方については布を掛けて目隠しを行うなど、プライバシーにも配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室内では、入居者様個々の状態に合わせて、ベッドやタンス、ポータブルトイレの位置を設置している。エアーマットや体圧分散マット等も必要に応じて使用して頂いている。また、スムーズに起き上がりが可能なようにPバーも利用している。		